

【日本留学レポート】

日本の日常生活での些細な幸せ

-東京での留学経験-

The Little Joys of Daily Life in Japan: My Experience Studying Abroad in Tokyo

東京大学大学院人文社会系研究科・日本史学外国人研究生 トーマス モナハン

Thomas Monaghan

(Research student -Japanese History, Graduate School of Humanities and Sociology,
Faculty of Letters, The University of Tokyo)

キーワード：留学、東京、日本留学

なんで日本に留学をしに来たか

日本に住んでいる外国人として「なんで日本に来ましたか」と「日本が好きですか」という質問はよく聞かれる。後者を答えるのは簡単だ。「はい、日本が大好きです」と必ず答える。もちろん、日本には好きではないものもあるけれども、それはどの国でも変わらない。日本の至る所にある美味しい料理や便利な公共交通機関、清潔な歩道や店員さんの礼儀正しさのおかげで、日本は外国人にとって生活しやすい国に違いない。しかし、それよりも重要な日本の長所があると私は思う。それは、日々の面白い発見を通じて、日本語と日本についての知識や理解を深められることだ。一步一步日本語が上達していく感覚が、私の日本での暮らしを幸せなものにしてくれる。日本にいと難しいことに遭遇することもあるが、すべてが勉強になり、満足感を得ることができる。

「なんで日本に留学をしに来ましたか」という質問への答えは長い話になってしまうが、よく考えた上で三つの理由があると思う。まず、言語を勉強するのが好きだからだ。エジンバラ大学の学部3年生の時にスペインに留学し、スペイン語を身につけた。スペイン語を勉強するのはとても楽しくて、スペイン語を話したり聞いたりするのが好きになった。それで、若いうちにスペイン語より難しい言語を勉強しようと思い、中国語にも興味があったが、日本語の発音はスペイン語とそんなに違ってないと聞いたので日本語に挑戦することにした。日本語を勉強し始めてから5年経った今年、日本語能力試験の一番高いレベルである一級の試験を受けたが、すごく難しく合格する自信がない。言語

を勉強するのに、終わりはない。日本語は難しいけれど、日本語の勉強は楽しくて、特に漢字を覚えるのが好きだ。例えば、道を歩いていて「棚澤書店」や「基督協会」などのような看板の漢字の読み方がわかると、嬉しくなる。言語を勉強するための決意や我慢強さは重要に違いないが、それよりも「楽しさ」の方が重要だと思う。皆は「日本語は難しい」というけれど、実は文法的には難しくないと。ただ、表現や言葉、漢字などが多いので流暢になるのは数年間の、比較的長い時間がかかる。つまり、日本語を勉強することは哲学や数学の概念を把握するような「縦の難しさ」ではなく、多くの言葉を暗記して数年間を渡って毎日勉強しなければならないような「横の難しさ」ということが言える。この理由で、日本語の勉強の方法は楽しくなければ、長続きせず、やる気が消えてしまう可能性がある。それゆえに、留学生は勉強のやる気を起こさせる環境で暮らすべきだと思う。

日本留学を決めた二つ目の理由は、大学で歴史を勉強するためで、歴史に興味があるからである。歴史や哲学、文化の交流や近代社会の展開というような課題に興味を持っている人にとって日本は非常に面白い国だ。日本の歴史は長くて、数百年に渡って何回も体制がすっかり変わった。平安時代から鎌倉時代、幕末から明治時代のように大きく異なっている時代が存在し、歴史上一つの日本がずっと存在していたのではなく、多くの社会がこの島国に生まれたと言える。日本固有の歴史の勉強を通して、様々な観点から世界史が理解できる。さらに、日本人は自国の歴史に大変関心があるようで、大河ドラマを始め、毎年多数の面白い本が出版され、歴史のあるところや文化遺産もよく保存されている。つまり、日本の歴史は「生き生きしている」ということだ。私は5年間日本について勉強しているが、日本に飽きるどころか、日本について勉強すればするほど面白くなっている。

日本に来た三つ目の理由は、文化の交流と海外経験は楽しくて、いろいろな価値があると思ったからだ。五年前 JET Programme¹の外国語指導補助教員として初めて日本に来て、直島という瀬戸内海の島に住んでいた。直島の幼稚園と小・中学校で生徒と先生たちと仲良くなって、私は英語や海外の文化を教えているうちに、皆から日本の文化や習慣を学び、田舎の生活に慣れていった。2年間直島に住み、日本語を身につけてもっと日本に関して勉強したかったので SOAS（ロンドン大学アジア・アフリカ学院）で「日本学と集中日本語」という修士課程に入りアカデミックな日本語に加えて日本の美術史や文学、宗教や歴史などを学んだ。海外で日本についての本を読んで知識を深め、日本に戻るた

¹ JET Programme

JET プログラムは、「語学指導等を行う外国青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Programme)の略称で、主に海外の青年を招致し、地方自治体、教育委員会及び全国の小・中学校や高等学校で、国際交流の業務と外国語教育に携わることにより、地域レベルでの草の根の国際化を推進することを目的としている。

<http://jetprogramme.org/ja/>

びに観点が変わるのは、とても興味深い。例えば、ロンドン大学の日本美術史の授業で、黄檗宗という禅宗についての論文を書いた。次に日本へ戻った時は宇治市の近くにある萬福寺という黄檗宗の本山を訪れた。萬福寺はとても美しく、勉強してきたことを目の前でみることができ感動した。私の将来の夢は、歴史を研究したり教えたりできるようなキャリアを積むことで、今年の8月から博士課程にてイェール大学に入学することになっている。SOAS 修士課程の終了からイェール入学博士課程の始まりまで1年間あるので、東京大学研究生として留学をしに来た。この1年間で言語能力を上達させ、自分の研究を進め、日本の大学の環境を体験するという目的を持って生活をしてきた。

留学までの経緯：申し込み

まず、留学するために奨学金と財源は重要なことである。大和証券はイギリスで大和日英基金²を運営し、毎年少数の「大和日本研究スコラー³」を選んで、そのスコラーの研究や活動を支援し学費と生活費のための奨学金を提供してくれる。それで大和日英基金のおかげで東京大学へ留学をすることができた。申し込みに加えて面接があった。多くの日本の大学の修士課程は4月から始まり、2年間かかるので、外国人にとって入りにくいものもある。しかし、偶然にも、面接の少し前にたまたま会った日本人の友人が、東京大学で9月から始まる大学院外国人研究生プログラム⁴を見つけて、それが私の希望にぴったりだった。この研究生プログラムについての情報は東京大学のウェブサイトに記載はあったものの自力では見つけられず、その日に友達と会わなければ日本へ来られなかったに違いない。日本の大学でこのような柔軟性のあるプログラムがより多く設けられ、かつウェブサイトでの申し込みの過程がもっと分かりやすくなると、外国人留学生への助けとなるのではないかと思う。

さらに、東大自体への申し込みにもかなり時間がかかった。手書きで三つの書類を日本語で書いたことは今でもよく覚えている。細かい規則がたくさんあって、失敗したら全部を書き直す必要があった。迷惑をかけたかもしれないが、東京大学の国際交流センターとメールで色々やりとりをして、ようやく私の申し込みが受け入れられた。

大学での学びや研究

暑い九月の初旬の日に初めて東大で指導教員との面会があることになっていた。東大の法学部のビルは外見から見ると綺麗だが、室内は思っていたより古く見える。法学部の中は迷路みたいだが、やっと日本史研究室に時間通りについた。そこで、先生は待っていて、優しい笑顔で挨拶してくれた。先

² <http://www.dajf.org.uk/ja/>

³ <http://www.dajf.org.uk/ja/scholarships/japanese-studies/scholars>

⁴ <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/oiss/application.html>

生の声は少し静かで、かつ語彙が豊かでたくさんの表現が用いられていたこともあり、理解するのが少し難しかった。東大生の皆もそのような丁寧な口調の友人が多く、最初は話が分からない場面が多くて困った。

私が受講する東京大学の授業は、大きく分けて三つあった。一番重要なのは毎週行われる私の指導教員の院生向けの「ゼミ」。秋学期には指導教員以外の、他の著名な教授のゼミにも参加した。大変勉強になる機会ではあったが、授業は毎週20時間以上になってしまい、少々忙しすぎるスケジュールとなってしまった。課外活動をする余裕もなく、日本語を読むことも大変時間がかかるので授業の予習が十分にできず、多忙ゆえストレスを感じるようになってしまった。その経験を生かし、春学期からは授業を半分に減少し、一番重要なゼミを優先した結果、落ち着いた暮らしを手に入れることができた。入学すると参加したい授業が多く、つい履修をしすぎてしまうことも多いが、現実的に予定を立てるのは大切だと感じた経験だった。

その他には、東京大学の日本語教室が行う、アカデミックリーディング、アカデミックライティング、発表のやり方、漢字などについて、日本語で実施される授業を受講した。これらの授業では、日本語を上達させるだけでなく、世界中から来た友達も作ることができた。

最後に、課内のゼミや授業以外に設けられた、課外のセミナーも多く受講していた。例えば、ほぼ毎月、私の研究と関係がある「鹿児島史研究会」に参加していた。他にも、毎週大学院生が指導する「近代史勉強会」で、評価されている歴史の本について話し合ったり、古文書の崩し字を読んだり、貴重な経験ができた。実はこの勉強会はゼミよりもカジュアルな雰囲気、数少ない学部生と一緒に謎に包まれた草書を解読したりできたのは、とても楽しい時間だった。

これと違って院生のゼミは難しい。このゼミで大学院生が史料やデータについて研究発表し、残りの一時間ぐらい質疑応答に答える。皆の知識が深かったので、分かりにくい明治時代の史料を分析したりと、とても高度な内容だった。私のような知識不足な留学生にとって、発表を聴きながら難しいレジュメや史料を読むのは大変で、質疑応答の時間に適切な質問を考えても正しい日本語にして伝えるのは難しいので何も言わず、議論にあまり貢献できない場合が多かった。私が慣れているイギリスでのゼミは、幅広い議論を気軽に話し合うスタイルで、理論的や哲学的な話が多い。一方で、日本でのゼミでは実証的な研究が多いと言える。友達から聞いた話では、海外の研究者は「森に迷っている」といい、日本人の研究者は「木の上で迷っている」という表現があるらしい。つまり、海外の日本史の研究者は日本の研究者ほど知識や語彙力を持っていないので理論に集中し、新しい観点や枠組みを見つけようとするということだ。例外もたくさんあると思うが、大雑把にこのような違いが挙げられ

る。それぞれいいところも悪いところもあるに違いない。イギリスのゼミで政治的な話で喧嘩が起こるほど攻撃的に話し合う場合もある。少なくとも日本のゼミで皆はお互いに意見に反対していても尊敬を表し、丁寧に話し合う。ゼミで理解が追いつかず、何も質問やコメントができなかったものの、日本の研究者は何を研究しているか、どのような歴史的な「問い」を発しているか、ということを知るだけでも、とても勉強になった。

日本の大学のとてもいい習慣は先生との飲み会だと思う。午後の発表会や研究会などの後、皆で近くの居酒屋に行って酒を飲みながら会話をする。このようなカジュアルな状況で先生と気軽に話すのは貴重な経験になり、私の東大でのいい思い出だ。イギリスの大学で先生と一緒に飲むのはとても稀なことだが、日本と違ってキャンパスの中には「JCR」(Junior Common Room)という学生が運営する安いバーが必ずあり、そこに先生があまり入らず、学生の皆が集まったり楽しんだりするスペースになる。日本で先生と飲むのは楽しくていい経験になるが、先生がいない時に先輩と同級生と遊ぶ機会が一回もなく、これはイギリスとの大きな違いであると思う。

今年の一月の研究会では、私が発表させてもらった。初めて二時間ほどの長い日本語での発表をし、準備が大変でかなり緊張していた。日本の発表では多くのレジュメを配布資料として用意せねばならず、発表の日の朝からずっと家の近くのコンビニを走り回ってたくさんの資料を印刷していた。印刷機を使う行列がすでにあり、印刷機が印刷中壊れてしまうこともあって、すごく焦った。しかし、発表の後に先生と先輩たちは様々なアドバイスをくださりとてもいい経験になった。留学している時にこのような機会があったら、いかに怖くても必ず挑戦に応じるべきだと思う。

留学をすると、研究の推進や言語能力の上達だけではなく、多くの友達と絆が作れる。たまに、私は先輩の論文の英語の部分の直してあげ、英語の史料の筆跡の読み方も助けてあげる。これに返礼として先輩たちは色々助けてくれる。授業の中の分かりにくいことだけではなく、大学で行われる面白いイベントを教えてくれ、私の研究に関する論文も教えてくれる。特に、東京大学では一人の大学院生が「チューター」としてついてくれ、定期的に会い、話し合うことができるシステムがある。このチューターとは将来連絡をとり続け、研究テーマも近いので一緒に研究し共同する機会があるだろう。この「チューター」制度はとてもいいことだ。

東京の生活

最初に日本に来た時は、荒川区にある1LDKに住んでいた。礼金がなく、家具やインターネットは全部備えており、イギリスで写真を見ただけですぐに決めた。解約の料金もないのですぐ引っ越しでき

ると思って、とりあえずその荒川区のアパートに住もうと思っていた。しかし、家賃は高く、高速道路沿いにあり、かつ日暮里舎人ライナーもすぐ横を走っているのでもうさく、晩御飯を一人で作ってテレビを見ながら食べるのは寂しかったので、二ヶ月後にシェアハウスに引越した。その荒川区のアパートはあまり良くなかったが、いい思い出にはなった。西日暮里にある行きつけの讃岐うどん屋、日暮里舎人ライナーが発車する音、下町のゴミゴミした風景などは今思い出すと懐かしく思う。さらに、荒川区は観光客にとって見所がなくても、歴史家や江戸時代、現代の東京を深く理解したい人にとって興味深い地域だと思う。私はカフェと静かな緑がいっぱいあるところが好きだが、荒川区に住む経験は価値があったに違いない。

その後移り住んだシェアハウスは、東大のキャンパスから20分歩いて便利な本駒込にある。お寺に囲まれており、とてもおしゃれなカフェがすぐそこにあった。静かな環境であり、なかでもシェアハウスに住んで一番良かったことはハウスメートと仲良くなったことだった。一人で晩御飯を食べるのではなく、毎晩ハウスメートと一緒に晩御飯を食べたり、会話したり、冗談を交わしたり、料理を作ったりしていた。東大の真面目な環境に一日中いて、帰ってからこのような楽しい時間を過ごすときっぱりして、貴重な思い出になった。大学の外にも、留学生生活を豊かにする場があるのだ。シェアハウスで色々な友達ができ、ハウスメートと一緒に東京を楽しめた。

JET Programmeで初めて日本に来た時、日本の田舎に派遣され、田舎の観点から日本を経験した。ほぼ毎日おしゃべりなおばさんが知らない野菜をくれて、放課後島を全部歩いて美しい自然と接した。それと比べて、東京に来て大都市の生活を送るのは全然違う。東京に来る前に二年間ロンドンに住んでいたが、同じ大都市でも東京のラッシュアワーの混雑した電車にはびっくりした。公園がたくさんあるロンドンと比べたら緑も少ないと思う。さらに気づいたのは東京で地平線が見えない。田舎で日本の綺麗な秋空、冬空、夕日を楽しめるのが好きになったが、東京で高層ビルが空の眺めを遮っている。しかも、東京のどこかに行こうとしたら、長い間地下鉄の広い駅で迷い終わりが無いトンネルを永遠と歩いているかのように感じる。あと、東京の物価は高い。お金がなくなる場合が何回もあったので、毎回お金を使うたびに携帯に記入する習慣をつけた。自動販売機の120円のコーヒーさえ記入する。それでお金に限られている学生の生活を送り、東京を十分楽しめた。東京のような魅力がたくさんある町に、限られた期間住むのなら、毎日楽しむことができる。ただし、お金が消えないように、疲れもたまらないように注意しなければならない。

それにしても、東京はロンドンより便利で思っていたより生活しやすい街だ。東京の長所は何よりも安全であること。世界有数の大都市にも関わらず、何時でもどこでも歩けるほど安全だ。東京にい

る間、勉強の休憩として町歩きが好きになった。特に文京区や神保町などの、伝統的な学生街には、面白いビルや綺麗なお寺、おしゃれなカフェが見受けられた。関東大震災、第二次世界大戦、大戦後の復興のせいで東京に歴史的な建築や風景があまりないと言われているが、残っているものがなくても歴史を感じることもできることが多い。例えば、神保町の本屋を見て回り、昭和っぽいカフェやカレー屋を訪れるのをお勧めする。東大のチューターに教わったのだが、神保町のある本屋のビルの外見に、世界大戦のせいで実際に行われなかった1940年の東京オリンピックの装飾が残っている。あと、六義園、新宿御苑、小石川後樂園などの庭園を楽しむのも好きだ。そして、東京からたった二時間で、筑波山や御嶽山などの山に登れることも魅力の一つだ。週末の山頂には観光客が多いが、静かな森の中でハイキングをして、温泉に入ると、リフレッシュできた。

留学生の暮らしは忙しくて、大学と日常生活で、多くのわからないことやカルチャーショックに遭遇する。そんな生活のなかで、ストレスが溜まりすぎないように勉強と遊びのバランスをとる必要がある。そのために居心地がいいところを見つけるのは重要だと思う。そのために快適な住まいを見つけることが大事なのはもちろんのこと、行きつけのカフェや好きな図書館、毎日コーヒーを飲んで休憩する習慣や帰り中の散歩の風景を見ることも、暮らしを豊かにしてくれるのではないだろうか。このような日常の些細な幸せも、振り返った時に留学の素敵な記憶となるだろう。将来東京に戻ったときに、たくさんの懐かしい思い出が迎えてくれるはずだ。